

アジアのデザイン文化の比較研究

山車の造形と祭礼文化を中心にして

COMPARATIVE STUDY OF DESIGN CULTURE IN ASIA Focusing on The Forms of Mountain Floats and Festival Cultures

今村 文彦 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
杉浦 康平 アジアンデザイン研究所 名誉教授
齊木 崇人 大学院芸術工学研究科 教授
山之内 誠 デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授
黄 國賓 大学院芸術工学研究科 助手

Fumihiko IMAMURA Department of Visual Design, School of Design, Professor
Kohei SUGIURA Research Institute of Asian Design, Honorary Professor
Takahito SAIKI Graduate School of Arts and Design, Professor
Makoto YAMANOUCHI Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
Kuo-pin HUANG Graduate School of Arts and Design, Assistant

要旨

本報告は、アジアンデザイン研究所の活動としてアジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。アジア各地域でみられる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、現地調査、比較研究を通じて総合的に検討し、その全体像、デザイン手法(語法)を明らかにすることを目的としている。

研究所では、中国浙江省寧波市前童鎮の元宵節の祭礼とその際に曳きだされる鼓亭、抬閣などの山車の形態や宗族等の社会組織について調査した。また香川県観音寺市のちょうさ(太鼓台)についても太鼓台の構造と氏子組織等の調査研究を進めた。個別事例について理解を深めることを通じて、実践的に山車のデザイン手法を探る試みである。また、標山のイメージ図による復元を國學院大學と共同で進めた他、研究成果の教育への応用として学内で授業を実施するなど多岐にわたってアジアのデザインについていくつかの重要な知見を得ることができた。

これらの成果をもとにさらに継続的な調査を続け、社会構造、空間構造とも関連づけて、総体的に祭礼の仕組みと山車の造形を把握していく予定である。

Summary

This report deals with the main research theme of Research Institute of Asian Design (RIAD), focusing the cultures of mountain floats in Asia from design-centered approach. We want to make clear design technique (language) of mountain floats from their wide variety of forms, symbolic meanings, cosmology and their relationship of society and natural environments.

Members of RIAD made researches of new year festival in Qiantong, Ningbo city, China, that is famous of specific forms of acrobatic and drumming palanquins symbolizing holy mountain in Chinese mythology. Also in Japan, we researched the structure of mountain floats and social organizations of *ujiko* (parishioner of Shinto shrine) of *Chousa Masturi* held at Kan-onji, Kagawa Prefecture.

We continue to research other type of floats in Asia and Japan, in order to make clear not only their symbolic meanings and design languages, but also the relationship of social structure and structure of settlement with ceremonial process, based on these outcomes of researches.

○研究目的

本研究は、アジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。アジア各地域でみられる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、現地調査、比較研究を通じて総合的に検討し、その全体像、デザイン手法（語法）を明らかにすることを目的としている。これらを通して、さまざまな山車の形態、造形、地域的固有性の背後にある基底的共通性に着目し、アジアのデザインにおける文化的特徴、独自性を追求、把握することを目指している。2011年度は山車の祖型を探る試みとともに、国内外での調査を実施した。以下にその概要を記す。

○標山復元プロジェクト

山車は神を招く依り代である神籬（ひもろぎ）から発展したものとされるが、祭りの山（山車）や鉾の原型とされるのは、平安期の大嘗祭の標山（しめやま）であるといわれる。これは悠紀（ゆき）・主基（すき）の両国の役人が立つ位置を示すための目印で、榊・木綿・日月などの装飾を施した山形の構造をしていたという。しかし、これまで標山の形態を復元したのものがあるものの不明な点も多いことから（図1）、國學院大學伝統文化リサーチセンターと協力してイメージ図として復元することにした。國學院大學茂木栄教授、同

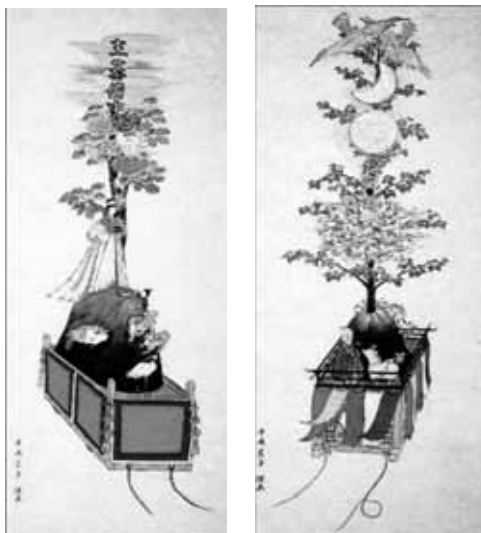


図1 標山復元図（國學院大學学術資料館所蔵）

大學伝統文化リサーチセンター鈴木聡子研究員による小研究会を研究所で開催し（6月）、標山についての理解を深めた。その後、本学大学院生にイメージ図の作成を依頼するとともに、山之内所員が建築史的な立場から文献を整理して、実証的な復元考証に基づく復元図を提案することは困難であるとまとめた（2011年度研究所報告書）。今後、各地に残る祭りの山車を参考に、標山の復元イメージを作成していく予定である。

○国内祭礼調査－香川県観音寺市ちょうさ祭り

瀬戸内海地域を中心として西日本各地に広く分布する「太鼓台」と呼ばれる山車は、その独特の造形と躍動感溢れるパフォーマンスにより、日本を代表する祭礼に数えられる。太鼓台は主に四国北部の香川、愛媛を中心に分布するが、東端にあって太鼓台の歴史で重要な役割を果たしてきたのが、香川県観音寺市の太鼓台である。研究所では、2011年10月14日から17日までこの祭礼の観察調査をおこなった。

観音寺の琴弾八幡宮の祭礼は、毎年10月の第3週の金・土・日の3日間にわたって開催されている（2011



写真1. 太鼓台（観音寺）



写真2. 網目が特徴のトンボ

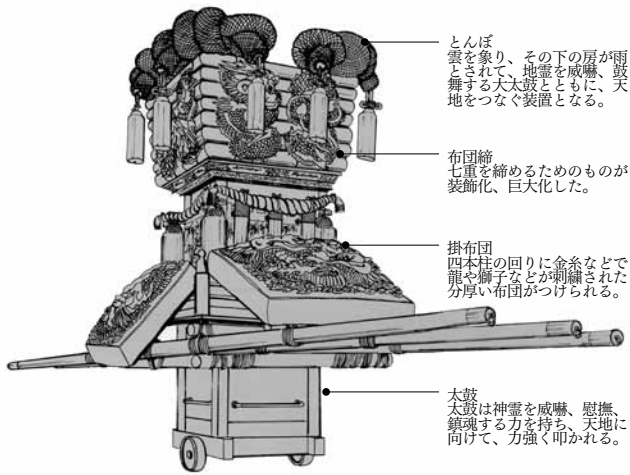


図2 太鼓台の構造

年は10月14～16日)。祭礼の中心となるのが太鼓台の町内運行と神社への奉納である。祭礼には現在9台の太鼓台が奉納され、氏子町内に昇きだされる。個別に町内を練り歩く金曜日を除いて、土曜日と日曜日は基本的にほぼ同じ日程で実施され、午前は氏子町内を回り、午後から宮入する。

観音寺の太鼓台は、高さ3～5メートルほどの4本柱に組んだ中央下部に太鼓が据えられる。7枚の布団が上部に載せられ、七重(しちじょう)という装飾物が大きく上部にせりだして付けられる。これを担ぐための長い昇き棒が4本柱に取り付けられ、そこに精緻に獅子や麒麟などの吉祥文様が刺繍された巨大な掛布団が掛けられる。重さは2～3トン近くあり、100人近い男たちで担がれる(写真1・2)。

観音寺の太鼓台の特徴は、七重の上部の四隅に蝶結びにした「とんぼ」が白地に網の目掛けしたものが用いられていることで、南隣の豊浜(観音寺市)の赤、太鼓台を代表する新居浜(愛媛県)の黒と対照的である。また、七重にかけられる布団締も肥大化している。太鼓台は、その名称そのままに移動する太鼓を中心にして吹き抜けの構造になっている点は興味深い。太鼓の音は、天と地の2方向に向かって鳴り響き、天地鳴動するのである(図2)。

○海外祭礼調査—中国浙江省寧波市前童鎮の元宵節
中国・江南地方は古来より独自の山車文化を育て

きた。特に、浙江省寧波市寧海県の前童鎮は、明清時代の古民居が数多く残る古鎮で、伝統的な生活文化が今なお色濃く継承されている。中でも前童鎮で旧暦正月に行われる元宵節には鼓亭、抬閣、秋千という山車が18台も曳きだされる。



写真3. 鼓亭

1月14日と15日の2日間の祭りは非常な賑わいをみせる(写真3・4)。これらの山車は、前童鎮の氏族(宗族)の各傍系氏族がそれぞれ所有し、奉納されるように、前童鎮の社会組織や地域構造と密接な関連性をもっている。また山車の造



写真4. 抬閣

形には中国の伝統工芸、神話、歴史故事、音楽、曲技などが凝縮され、中国の山車文化を理解するには不可欠である。研究所では2011年8月25日～27日、2012年2月4日～7日の2回の調査を実施した。

この祭りは、明代に童濠という人物が水利灌漑工事を敢行し、繁栄の礎を築いたことを顕彰するために始まったといわれる。14日の午後から鼓亭、抬閣、秋千が曳きだされ、童濠を祀る塔山廟や多くの堂宇を巡行する。夜も爆竹や煙火が盛大にたかれ、銅鑼の音とともに壮観である。

前童鎮の鼓亭は当初は太鼓を納めるために制作されたといわれるが、現在では太鼓は後からついて回る。



写真5. 鼓亭の彫刻



写真6. さまざまな吉祥紋様

鼓亭の高さは約5～7メートルで、5層または7層で構成され、各層には中国の伝統的な故事、神話などに題材した繊細な彫刻が刻まれ、8人ほどで曳いていく。これらのさまざまな彫刻、装飾紋様は単なる装飾というだけに留まらず、その背後に特定の意図や考えを想定できる(写真5・6)。今後、これらの鼓亭、抬閣、秋千の実測、装飾の意味を分析し、その造形原理について検証していく予定である。

○学内連携

研究所ではさまざまな研究活動をおこなっているが、その成果やアジアデザインの面白さを学生に伝える役割も大学が設置する研究所の活動として決して無視できない。その一環として、杉浦所長による「ことば十もじを着る」と題するレクチャーをファッションデザイン学科で

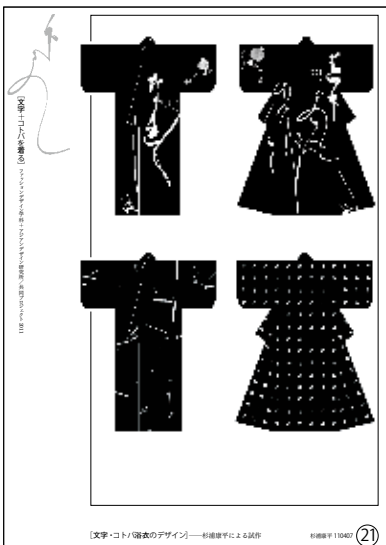


図3 学生に配布した資料の一部

2011年4月におこなった。研究所の「出張授業」である(図3)。

アジア各地でみられる文字を装飾として用いて、着る人の心を伝える文化を現代的感覚で表現する試みであったが、かなの



図4 学生のアイデアスケッチ 写真7. 完成した作品

優しい線を用いた斬新なゆかたなどが学生たちによって表現され、成果をあげた(図4・写真7)。

○第1回国際シンポジウム報告書の刊行

また、2010年6月に開催された研究所の開設記念国際シンポジウム「動く山ーこの世とあの世を結ぶもの」の報告書を刊行した。

○今後の展開

2011年度は海外および国内での調査を始めとして、標山の研究会、学内での連携など山車の造形や祭礼文化にかかわる基礎的な調査研究を中心に実施した。これらの研究成果の問題点を整理、検討したうえで、方法論を再考し、アジアの他の地域に展開していく。日本を含めたアジア各地との比較研究を通じて、アジアの山車の構成原理、コスモロジー、自然観などとのつながりを明らかにしていく予定である。

また、急速に変化する現代のアジア世界のなかで、山車を含めた各地の祭礼の果たす社会的役割を見直し、地域的伝統の再生と再創造へのデザイン的方法論の開発を目指す。

その他の共同執筆者

大田尚作 デザイン学部プロダクトデザイン学科教授
松本美保子 名誉教授 / 佐久間華 大学院芸術工学研究科助手 / 曾和英子 デザイン学部プロダクトデザイン学科非常勤講師